



第6号

さらしなのみ

「友の会」だより



2002年春



大谷功さん(右)の畑で今も花を咲かせる「千曲」の原木
(関清春さん撮影)

まいたの楽農家

大谷功さん。大正十一年(一九二二)生まれ。仙石大境。養蚕主体の農家を継いだ。戦後、果樹栽培に転換し、多様な種目に挑戦。リンゴ剪定には独特の大谷流とも言える技術を持ち、地元の栽培者、他所にも出かけて指導に当たる。

昭和四十年ごろ、導入された桜桃では、大谷さんが普及に努めた一本から、大変良い枝変わりが見つかり、県の特産課に認められ、新品種「千曲」と名づけられた。ご本人は「大谷」でもよかつたかななどと申されていたが、「千曲」は県下各地で作られるようになる。

当地のリンゴの主体となっている「ふじ」の元は「東北7号」という。大谷さんはいち早くこれを導入、試作され、近在の果樹作りの諸氏にこの穂木を惜しげもなく、分け与えた。当時「ふじ」の穂木は十ダ何円など高額で取引されていたのに、大谷さんは全然無関心だった。

「千曲」だって品種登録すれば特許になったのに「誠の楽農家」というべき人。毎年の縄文まつりの大きな青竹はいつも功さんからもらっていた。(文〳関清春・塚田哲男)

以前から古代体験パークでもしろいお祭りをしていると聞いていて、機会があれば是非参加したいと思っていた。

私は現在、農業

改良普及員として戸倉町を担当しており、戸倉町の農業の活性化委について町、JA、農家などとも意見交換したりしていた。

その中で、生活改善グループの方々が

今回初めて、自分たちで技を磨いた「そば」を出店することとなり、その応援も兼ねて、お祭りに参加してみた。

家族連れで参加させていた

したが、全体の印象として、とてもコンパクトに、しかも手作りの感じが伝わってきて、天気は雨だったが、心はほんわか暖かくなった気がした。

心がほんわか暖かく

竹竿を使った原始的な釣り、イワナのつかみどりと塩焼き、古代米などの唐箕(とうまき)と

うみ)を使うての選

別、堅穴住居でのバーベキューなどいろんなメニューを楽しんだ。

我が家の子供たちも普段

体験できないことを体験できて大満足の一日だった。

お祭りのフィナーレを飾った仮装コンテストでは、子供たちから女性グループ、お年寄りの仲間など、各層の方々が趣向をこらした仮装踊りを披露され、五千年前の人



我が子も大満足の1日

第9回さらしなの里縄文まつり

(昨年10月28日)

類の姿を彷彿とさせられた。

一週間後の更埴市の古墳館祭りにも参加した。規模とPRの面では負けていたが、アットホーム感では数段勝っていたと思う。

また、駐車場のスペースがもうちょっとあればもっと多数の観光客など気軽に参加できるのではと思った。

これからも、このイベントがさらに継続していければいいな。そして戸倉町の他のイベントとも連携して町のPRに結びつき、活気あふれる戸倉町になってほしいと思います。(清水勝重・上田市在住)



三月十日に文化部好例の視察研修が、新潟県塩沢町に二十一名の参加で行われました。塩沢町には、まだ二一三坪の残雪がありびつくりしました。

今泉博物館では、世界各国の珍しい仮面や人形、パプアニューギニアの原住民の生活道具や精霊の像、現代日本の版画芸術品の展示に感激。次に塩沢町の機織の歴史を今に伝えるつむぎの里を見学。最後に雪国の生活を紹介した「北越雪譜」で有名な鈴木牧之の記念館を訪れました。車中も楽しく和やかに研修を行うことができました。(塚田克巳)

飯田から更級にやってきたのが三十年前。同じ長野県とはいえ、南信と北信は天気からして大違い。大げさに言えば外国にきたような気がし、「男尊女卑」の最たるものに思えました(でも今は違いますよ)。

言葉も語尾の下がる陰にこもった言い方や、どぶかし、鬼イザル、げんのつ玉、かつくらうなどの接头語、接尾語の語調の強さに恐れ、またワニル、シヨウシイなど分からない言葉もたくさんありました。

早口で言葉を省略した言い方は、話の内容も分かりにくく、とろく

て初々しい私は怒られたと勘違いして、よく涙したものでした。分からない言葉は自分勝手に漢字に置き換えて意味を考えて

語調の強さに涙したことも 女衆の苦労も分かります



羽尾斜子織りの考案者「おまさん」の民話朗読劇
に出演した塚田志保子さん(中列右から2人目)

いたので、的はずれなこともありました。「エ」を「イ」と発音することはずっと気づかず、「〇〇イ」という名前が多いところだと思っていたら、実は、「〇〇エ」さんだったのです。

今でこそ「坊城平」ですが、最初は「平(タイラ)」が「寺(テエラ)」に聞こえて、てつきり、ここで祈願すると厄や虫除けがかなう「防除寺」だと思っていま

でも今ではたくさん仲間が

飯田の食べ物
名物
にご

飯を押し詰めた「五平もち」があります。これは味噌ダレだけで知らぬ間に一人で五合も食べこんでしまうことから「五平五合」

と言うんですが、それくらい私はご飯になじんでいたの、おやきだけで食事が終わり、というのは気がすまないものでした。腹はいっぱいでも口がさびしくてちよつとご飯を食べなければ落ち着かなかったんです。

うどんの食べ方は多様で、昔の女衆の苦労が分かります。中でもおしぼりうどんは、すばらしい食べ方だと感心しました。

そんな私も「友の会」に入ったころから、この地をもっと好きになろうと思った矢先、いろいろな誘いに乗って活動しているうちに、何代も前の明徳寺のオツシヤンや、宗良親王、羽尾斜子織りの考案者であるおまさんに会えました。

これからも仲間や家族に支えられて更級の生活をつなぐ一員でありたいと思います。
(塚田志保子)



関尚志さんが三月十九日、事故で亡くなりました。関さんは「友の会」創作部長として尽力されました。ご冥福をお祈りします。

おらほの冠着 ⑥

山すそ近く住む人は、山に対して著しい畏敬の思いを抱いていた。

縄文時代の人々は、山こそ恵みを与えてくれるまたとないありがたいものとみて、さ

らしなの里では冠着山をうやまい、山そのものを神様とみていた。

あちらには極楽浄土が

つたのだ。

福田遺跡でみられた列石の遺構は、人々が寄り集まって冠着山の方向に石を並べてお祈りをしたあとを示している。

こんな思いは、この山里に住みついた人々



御麓の弥勒観音菩薩

の心の底にしみついでいて、冠着神社というお宮も造られる。このお社のご本尊は、「月読命」だというのが、実は冠着山そのものがご神体なのである。

時代が移って仏教が伝えられての後、山はまた新たな信仰の対象となる。

山すそに住む人々は、この山の向こうに

は存外な世界を想像した。あちら(西方)に

は、美しい世界が

広がっており、仏

様がおられて極

楽浄土をつくって

おられるのだ。

今に私の末期が

来た時には、その

世界から阿弥陀

如来(他の仏様でもよ

い)が現れて、私を浄土に導いてくれるのだらうという思いである。

山越し如来の信仰というのだが、自分の力では抜け出せない境遇にあつて救いを自ら求めた信仰である。

御麓にある弥勒観音菩薩はその思いの一

端ではなからうか。

(塚田哲男)

〈編集後記〉

今では全国で栽培されているモモ「千曲」の原木と持ち主の大谷功さんを紹介したい一と、関清春さんから写真、原稿もいただき、あとは印刷にと思つていた矢先の4月20日、大谷さんの訃報が届きました。

かつては固く缶詰でしかモモが食べられない時代。甘くて瑞々しくかぶりつける実を結んだときの感激はいかほどだったでしょうか。

「千曲」の命名は原木のある畑が千曲川堤防沿い(須坂)にあったことが理由かもしれませんが。上山田町、更埴市との合併後の新市の将来構想では、千曲川をまちづくりの柱として生かすことがうたわれていますが、「千曲(川)」再発見といった趣があります。

今号は奇しくも清水勝重さんと塚田志保子さんという更級を少し客観的にご覧になれる方々から原稿をいただきました。うなぎきながら読んだ方も多いのでは。(大谷善邦)

さらしなの里友の会事務局

T389-0812

長野県埴科郡戸倉町羽尾二四七の一

さらしなの里歴史資料館内

電話026(276)7511

FAX026(261)4161